

河村 満 (編)

連合野ハンドブック 完全版

神経科学×神経心理学で理解する大脳機能局在

花 田 恵 介
(阪和記念病院, 作業療法士)



神経科学は、PT, OT, ST (以下, セラピスト) が脳機能を理解し, リハビリテーション介入を計画するうえで欠かせない。脳損傷後のリハビリテーションにおける革新的な治療機器開発においても, その理論的根拠は神経科学の知見によるところが大きい。しかし, 一人ひとりの患者がみせる症状は, 統制された実験環境における反応よりもはるかに複雑で, 一見では整理しがたいように思う。また, われわれは, 「目の前の患者がなぜそのような症状をみせるのか?」を説明したいとき, 神経科学の表面的な示唆だけをすくい取って曲解しがちである。本来であれば, 患者の症状が真にその知見と合うかどうか, 細かく症候を鑑別すべきである。

他方の神経心理学は, 脳損傷患者の神経症状をどう鑑別し, 患者の理解につなげるかを教えてくれる, 臨床現場に密着した知見である。しかし, 神経心理学的な知見のみでは, リハビリテーションを系統的に計画するための材料が不足しているように思う。われわれには, 急速に進歩する基礎研究の知見を取り入れ, 脳損傷ではそれがどう症状として反映されるかを注意深く観察, 記述していくこと

で, 隔たりを埋めていく作業が求められている。

本書は, その相補関係をまさに表現している。そして, 大脳連合野の神経学における過去(歴史), 現在, そして未来(課題)が示されている。この2点が, 本書の大きな魅力である。まず, 本書の編者である河村 満先生が, 連合野研究の歴史を解説なさっている。私が学生時代, 当然の如く学んだ用語や概念が, どういった変遷を経て成立したかを知ることができる。当時ブラックボックスとされてきた脳機能が, 現代の技術でより詳しく説明できるようになったが, だからといって, 人間の脳が昔と現代で大きく変わったわけではない。過去の神経学者は, 特殊な機器がなかった代わりに, 現象をきめ細やかに記しているし, それは現代にも十分通用する考え方である。「古を以て鏡と為せば, 以て興替を知る可し」(『貞観政要』)である。

本書のメインテーマである「連合野」については, 前頭・頭頂・側頭に分けられ, 各連合野の解剖と神経科学, 神経心理学の現在がセットで論じられている。他の書籍の中には, 神経科学と神経心理学の双方の視点が整理されずに書

かれていたものもあるが, 本書は「基礎編」と「症候編」でそれぞれの立ち位置が明確である。基礎編では各分野における研究の変遷から最近の知見が示されている。また症候編では, 諸先生方の豊富な自験例が提示されており, 読者はそれを読めば, 患者の症候をどのように鑑別すればよいかかわかる。

終章である「連合野私論」は, 福武敏夫先生がご執筆されている。長きにわたり臨床神経学を体現してこられた先生の自験例から, まだ明らかにされていない神経心理症候の可能性が示されている。福武先生がお示しになっている「今後の課題」は, 私たちが未来の臨床で明らかにすべき命題だと思う。

セラピストは, 他の医療職よりも同じ患者に長く接する機会が多く, それゆえ患者がみせる“不思議な”症状に遭遇する頻度も高いはずである。この分野に携わるセラピストであれば, ぜひ長く手元に置いておき, 折に触れて参照したい。

B5 判 320 頁 9,000 円+税
医学書院 刊
☎ 03-3817-5650